

英国留学で得たもの —安井てつと大江スミの場合を比較して—

柴沼 晶子

はじめに

日本は学制以後、教育の近代化のために当時の西欧先進諸国の教育制度、内容などを摂取するさまざまな努力を行うが、学制直後のお雇い外国人への依存から次第に脱し、将来諸学校の教授を担当すべき人材を養成するために留学制度を整え、その充実を図ることになった。ことに森文相によって諸学校令に基づく近代教育制度の骨格がほぼ整った明治20年代からは、学校制度の内実を整えるために、より細分化された専門的な立場から先進諸国の教育を摂取することが求められてきていた。それらの各学校令の整備の中でとり残された女子教育機関も、1895（明治28）年の高等女学校規定、1899（明治32）年の高等女学校令によって、急速に公教育の構造の中に組み入れられることになる。

安井てつと大江スミは、まさにこのような時期—前者は1897（明治30）年3月～1900（明治33）年4月、後者は1902（明治35）年12月～1907（明治40）年7月滞英—toに緊急課題である女子教育の中核たるべき家政学の研究のために、文部省より英国へ留学を命じられたのであった。二人にとって英国の留学体験が与えた衝撃は大きく、それはその後ともに女子教育の指導的立場にあって活躍する両者の女子教育観の依りどころとなり、我が国の女子教育振興に尽くすための使命感の源となった。

しかしながら、当時の女子教育の最高機関であった女子高等師範学校を卒業し、相前後して英国に留学し、帰国後母校に奉職し、さらにキリスト教を奉じ、学外においてもキリスト教教会関係の啓蒙的活動を行うなど、同じような立場にあった二人ではあるが、その女子教育に対する考え方には大きな違いがある。

安井てつは女子教育の本質を一般教養を身につけ、真理の追求をめざす、あくまでも女性をひとり人間として成長させることにありとし、その理想を東京女子大学の教育に具現させた。一方大江スミは女子教育の目的を良妻賢母の養成におき、女高師の家事科の主任教授として、家を斉える学としての家政学の確立に努めるとともに、女教師の養成、家事科教科書の執筆、家事教育の視察などによって家事科の普及発展のた

めに活発な活動を行った後、その理想を実現すべく自ら東京家政学院を創立した。このように二人の英国留学の成果は対照的な女子教育観の確立とその実践に展開された。

安井と大江には、同窓会がその最も相応しい執筆者に委嘱して公刊された青山なを氏による『安井てつ伝』⁽¹⁾、大浜徹也氏による『大江スミ先生』⁽²⁾がある。そこには両者の女子教育の推進に挺身した明治生まれのリーダーとしての使命感が漲っている。それだけに同じような経歴を持ち、国家の命を受けて英国にほぼ同時期に留学した両者の英国での修学の内容と女子教育の理想の相違が際立っているのである。また両伝記ともに同窓会を挙げての協力と期待のもとに執筆されているだけに、周到な資料収集と吟味による完全なものではあるが、英国の留学先について必ずしも明確でない部分がある。筆者は安井が学んだケンブリッジ・トレーニング・カレッジと大江の学んだバタシー・ポリテクニクとベッドフォード・カレッジの英国女子教育史上の位置づけを確認した上でその教育観に与えた影響を明らかにする必要があるのではないかと思う。ケンブリッジ・トレーニング・カレッジについては最近日本でも英国の女子高等教育の流れのなかで紹介されているが、バタシー・ポリテクニクについては現在に至るまで明らかにされていない。本論はこの点に触れながら、二人が英国留学によって学び、形成した女子教育観を比較して、二人の英国留学がわが国の女子教育にもたらしたものを明らかにしていくことを目的としている。なお両者の具体的な留学体験と女子教育思想の形成過程と特質については稿をあらためて検証したい⁽³⁾。

1. 生い立ちと経歴—英国留学まで

安井てつと大江スミの生い立ちと修学や教育者としての経歴を比較すると247～248頁の年譜のようになる。二人は女子高等師範学校では先輩と後輩の関係にあり、英国留学、卒業後奉職した母校、本郷弓町教会が発行した雑誌「新女界」、東洋英和女学校などが接点となっている。上の伝記に依拠しながら二人の生い立ちと英国留学までの経歴を追ってみよう。

(1) 安井てつ

安井てつは1870（明治3）年土井藩邸で父20才母19才の若い夫婦の初子として誕生した。父母が若く、弟妹が6人続いて誕生したために、てつはその後藩邸内で祖父母の手で育てられた。祖父は土井藩の槍の師範

であった。彼女が「女ながらも生粋の武士かたぎの人」と言われた所以である。筆者は安井の出自と祖父母による養育から、後年の彼女のキリスト教の受容が明治の士族階級のいわゆる「接ぎ木型」であったことと、女子教育において体育を重視したことの一つの理由を見ることができないのではないかと思う。小学校を卒業後、1881（明治14）年12才で東京女子師範学校予科に入学する。しかしこの予科は翌年に廃止され、別に付属高等女学校が置かれ、編入されることになった。翌年14才で高等女学校下等科の課程を卒業するが、「上等科は插花、図画等技芸的の科目が多かったので気が進まず、本校入学を志望して規則に定めた入学年齢の満十五才をまって⁽⁴⁾」東京女子師範学校に入学した。この選択も安井の若い時期からの学問志向を示している。

東京女子師範学校は安井の在学中2度改編されている。すなわち1885年（明治18）年森有礼によって東京師範学校に合併し、その女子部となったが、翌年1886年（明治19）年の師範学校令によって中等教員養成を目的とする高等師範学校の女子師範学科となった。さらに安井の卒業した1890（明治23）年には高等師範学校の女子部が分離独立し、女子高等師範学校となっている。師範学校の女子部から高等師範学校の女子師範学科に改編される過程で安井をはじめ優秀な者が選ばれ、13人で高等師範科2学年に移行されたので、この学年は高等師範学校第一回生として注目された⁽⁵⁾。東京師範女子部時代とこの高等師範学校女子師範学科生としての「教育の程度も高まりまして、殊に男子と女子とは同じ教室において教授される、男女共学ではありませんでしたが、気分においてはさらしたやうな気持ちで大いに緊張味を持った」⁽⁶⁾という体験は安井の男子と同等の教育を理想とした女子教育観の基底となったといえる。それは後のケンブリッジ・トレーニング・カレッジでの体験によってさらに強い確信となったものであった。

高等師範学校卒業後女高師助教諭として、また4年後の1894（明治27）年には訓導に任ぜられ、母校に奉職している。その間2年間岩手県尋常師範学校に赴任して地方の教員生活を体験している。この時期に英国留学以前の安井のキリスト教への態度を示す、当時盛岡女学校で教鞭をとっていた羽仁もと子との終日に及んだキリスト教をめぐる論議がある⁽⁷⁾。そして1896（明治29）年12月いよいよ教育学、家政学研究のため英国留学を文部省から命ぜられたのであった。その6か月前から津田梅子の自宅で起居して英語を学んでいる。出発は1897（明治30）年3月安井が28才の時であった。

(2) 大江(旧姓 宮川)スミ

大江スミは長崎のグラバー商館に奉公していた実直な父と働き者の母の二女として1875(明治8)年に生まれた。この長崎のグラバー屋敷の、時代の先端を行く空気の中で生まれたことが、大江の進取の気性を培ったといわれる。『大江スミ先生』には、大江の後年の大著『応用家事精義』のなかで「勤勉と信用とにより家運を発展せしめたる実例」として「長崎の人」という実父母の体験が挙げられており⁽⁸⁾、著者は母の語った新家庭の苦勞話に大江が家政学の原点を見出していたことを指摘している。母の主婦としての家計のやりくりや工夫はこの他にもいわゆる「大穴主義」⁽⁹⁾をはじめとしてしばしば語られている。深谷昌志は良妻賢母主義教育を成立させた要因に、1. 伝統的儒教的女性観、2. 庶民の主婦像、3. 西欧の婦人像および4. 天皇制イデオロギー、を挙げている⁽¹⁰⁾。大江の良妻賢母の思想には、これらの4点が認められるが、最も身近な母を通しての生活力旺盛な、夫と対等な意識で家事を引き受け切り盛りする庶民の主婦像の占める役割が大きいといえる。父母は子女の教育のために上京し、大江は翰絵小学校から東洋英和女学校に進学する。彼女の母は生まれた時からの顔のあざのため彼女の自立を促すが、長崎での見聞をもとに英語の習得こそ自立の手段となると配慮したという。東洋英和で宣教師の人格にふれ、その家庭的ななかにも厳しい教育とキリスト教の教えに新生への喜びを得る。在学中に鳥居坂教会で洗礼を受け、後に「英和女学校にて絶対善なる神様という観念を得た事はこの上も無き大事なことである」⁽¹¹⁾と述べ、ただ学問を授けるばかりでなく、宗教教育、人格教育に重きをおく母校の教育に感謝しているように⁽¹²⁾、東洋英和女学校の教育は大江の教育理念の原点であった。

東洋英和女学校を卒業後、母校の教育に携わるが、教授法に自信をなくして、年齢制限にかかる直前の1897(明治30)年女子高等師範を受験し、合格した。前述のように、女子高等師範学校はすでに女子部が分離独立していた。さらに1894(明治27)年に制定された「本学教育要旨」⁽¹³⁾に示めされていたように、男子とは異なる女子としての教育を徹底させたものであった。大江の入学した年に文科、理科に別れ、さらに1899(明治32)年には「技芸科」が新設された。これは同年の高等女学校令に対応した改組である。1901(明治34)年卒業後直ちに沖縄県師範学校教諭に任ぜられ、沖縄高等女学校教諭の嘱託となっている。しかし翌1902(明治35)年8月には文部省より家政学研究のため三か年の留学を命ぜられ、10月に英国に向かって出発した。

女子教育史	安井てつ	宮川・大江スミ
明3(1870)	2月23日誕生 旧藩主土井子爵邸	
4(1871)津田梅子ら留学		
5(1872)学制発布官立東京女学校設置		9月7日長崎にて誕生
8(1875)東京女子師範学校設立		
10(1877)東京女学校廃止		東京へ
13(1880)東京女子師範学校に予科を置く		
14(1881)	東京女子師範予科入学	
15(1882)東京女子師範学校予科廃止		
附属高等女学校新設	付属高等女学校へ編入	
17(1884)東洋英和女学校創立	東京女子師範学校入学	
18(1885)東京師範学校に合併女子部となる	校長高峯の教育学に感化される	
19(1886)師範学校令で高等師範へ改編		
20(1887)	東京高等師範学校2学年に	
21(1888)		芝区立輪絵小学校卒
22(1889)		東洋英和本科入学
23(1890)3月24日女子高等師範分離	3月高等師範学校卒業	
東洋英和ラージ事件	4月女子高等師範学校助教諭に	
25(1892)	8月付属小学校訓導	
27(1894)女高師教育要旨制定	岩手県尋常師範学校へ	
28(1895)高等女学校規程	女高師訓導に	東洋英和卒業
女子高等師範学校規程		同校教員となる
29(1896)	津田梅子宅に寄寓英語を学ぶ	女子高等師範試験合格
30(1897)女高師文科理科に分れる	12月英国留学を命ぜられる	
省令 女子高等師範学校	1月横浜発 3月ロンドン着	5月東洋英和退職
卒業生服務規則 5年間教職内	4月ハイスクールで家政学教授法	9月女子高等師範入学
2年は文部省指定の奉職	研究	
32(1899)高等女学校令	10月ケンブリッジへ	
女高師に技芸科設置	ミス・ヒューズに教育学を	
私立学校令	サレー氏に心理学を学ぶ	
33(1900)	6月ヒューズ氏とスイスへ	
	10月Oxford大で心理学研究	
	4月パリ万国博で新渡戸に会う	
	米国を經由 7月帰国	
	9月女子高等師範教授兼舎監に	
	12月海老名弾正より受洗	安井との出会い
34(1901)	ミス・ヒューズ来日	女高師卒業
	視察・講演に随伴	沖繩師範学校教諭
		同高等女学校教員嘱託
35(1902)		8月英国留学を命ぜられる
		10月出発 12月ロンドン着
36(1903)女高師学則改正 三分科		9月バタシー芸芸学校家政師範科入学
37(1904) 日露戦争勃発	シャム国政府の招きで皇后女学校教	
	育主任となる	

38(1905) 9月 日露講和条約		7月同校家政師範科卒業 ベッドフォード・カレッジへ 同校衛生科終了 8月帰国 2月女子師範学校嘱託 女子高等師範学校教授
39(1906)		
40(1907)	3月任期滿了英国へ 9月ウエルズ大で倫理、哲学、英 文学研究	
41(1908) 奈良女高師新設東京女高師と改称	8月帰国学習院女子部講師	
42(1909) 第六臨時教員養成所に家事科設置 4月「新女界」創刊	学習院講師辞職 女子英学塾講師 「新女界」主筆となる	女子高等師範学校専任教授 第六臨時教員養成所兼任教授 『家事実習教科書』
43(1910) 高峯校長役 後任中川謙二郎 高等女学校令改正実科高等女高 エディンバラ万国キリスト教育教 師大会	東京女高師講師嘱託付属幼稚園主事	
44(1911) キリスト教主義女子教育の統一 発展をめざす調査委員会設置	同左委員に就任	同左委員？
45(1912)	6月東京女子高師師範学校教授	
大2(1913) 6伝道区社団キリスト教主義女子 大設立計画		小学校理科教科書編集委員 教員講習会講師 教員検定委員会臨時委員 大江玄寿と結婚 『応用家事精義第一巻住居編』 『三ぼり主義』
3(1914)		
4(1915)		
5(1916)		
6(1917) 全国小学校女子教員大会	東京女子高等師範学校を辞す	
7(1918) 東京女子大開校「新女界」終刊	東京女子大学監 学長新渡戸稲造 新渡戸、後藤新平と欧米視察 学長就任	
12(1923)		
13(1924) 東京女子大荻窪村に新校舎		東洋英和女学校同窓会長に 東京家政学院開校 学院校長に
14(1925)	英語専攻部に英語科中等教員検定 認可	
15(1926) ヒューズ役		
昭2(1927)		東京家政専門学校設立校長就任 専門学校卒に師範学校 中等、高女家事科教員検定認可 28年 汎太平洋会議出席 渡米
3(1928) 日本共産党一斉検挙 中川役		
4(1929) 日本共産党一斉検挙		
5(1930)	大学部卒に国語科中等教員検定認可 国語専攻部に国語科中等教員検定 認可	
6(1931) 6月 満州事変		
8(1933) 東京女子大創立15年 新渡戸役	大学部卒に英語科中等教員検定認可 満州、朝鮮旅行、講演	専門学校研究科卒に師範学校 中等、高女裁縫教員検定認可
9(1934)	東京女子大学長辞職 名誉学長	
15(1940)	東洋英和高女顧問となる	
16(1941) 太平洋戦争勃発	東洋英和女学校校長事務取扱	
18(1943)		
20(1945) 太平洋戦争終結	11月7日 逝去(76才)	1948年1月6日 逝去(74才)

2. 英国留学で学んだもの

(1) ケンブリッジ・トレーニング・カレッジと安井てつ

安井に命ぜられた留学の研究題目は、教育学と家政学であった。『安井てつ伝』には「家政学と教育学を一つの学校で学ぶことは困難であるし、英国の女学校では家政学なるものを施していない、また自分にとっては必要ないのもっぱら教育学の研究に専念した」と述べられている⁽¹⁾。また安井が茗溪会雑誌に送った報告には、英国の家政学というのは衣食住の知識を中等以下の女子に与えるもので、理論も教えるが程度も低く、生徒の種類も上等でなく学問的に参考になるものはない⁽²⁾、と述べて早々に家政学の研究はあきらめてケンブリッジ・トレーニング・カレッジに入学している。

ケンブリッジにはすでに女子のためのガートン・カレッジおよびニューナム・カレッジが設立されていた。1880年代には当時女子の中等教育機関の普及とともにこれらの卒業生が教職につきはじめており、これらの女性の教師としての専門的教育の必要が認識されるようになってきていた。これらの高等教育を受けた女性の教職訓練のためにケンブリッジ・トレーニング・カレッジ（以下CTC）が構想されたが、その基本計画を作成したのはノース・コレジエイトの設立者であったバスとニューナム・カレッジのクラブ等であった。カレッジ史によれば1885年5月カレッジ創設のための会合が持たれ、9月に開校することが提案され、校長としてニューナム・カレッジでクラブのもとにあったヒューズが推挙された⁽³⁾。このヒューズこそ安井の信頼し、その女子教育観に最も大きな影響を与えた人物であった。安井はCTCを「母校に似ているがずっと程度は高い」と言っている。確かにともに女子の教員養成の最高学府であり、カレッジに在籍しつつ他のケンブリッジ内の講義を聴くことができたり、有名教授を招いての講義があるなどの点で安井の時代の高等師範学校と通ずる点が多い。安井は「ケンブリッジ大学で教育に関係のある学科を聴講する事が出来、又知名の学者と接触する機会も尠なくありませんので、私のような目的をもった留学生にとっては、この上もなく都合がよい学校であった」と述べているように⁽⁴⁾、その特色を十分に活用して、自身の留学目的を果たすことに努めたと思われる。授業の内容は心理学、論理学、教育史、衛生学、発声法、教授法、教育原理、学校経営であり、この他に教育実習があった。当時学生は週2、3回の教育実習を行っていたとされるが、筆者は安井がこの実習に参加したとは思わない。何故ならこの点についての安井の記述は見られず、後述するよう

に、東京女子大学の構想には教師養成の目標はなく、あくまでもリベラル・カレッジとしての理想が高く掲げられており、教員資格の申請を行うのは女子大設置後年を経て、しかも学生からの要望が出されてからでのことであるからである⁽⁵⁾。この点で多少時代は下るものの、大江の東京家政学院が教員養成を専門学校設置の目標の一つにしていることと対比される。

C T Cで学業以外に安井に多大の影響を与えたのは学生達の生活にみられる自律の精神であった。「私がこの学校に入学して最も不思議に感じたことは、何等の規則もなしに学生がよく規則的な生活をなすことであった。……社会は彼等に紳士であり、又淑女である事を期待する。彼等は家庭に於いて紳士として又淑女としての教育をうけ、学校も亦彼等をその如く扱うが故に、彼等には自重心があり、又強い責任感があった。そして決して表裏の行為をなさなかった。私は日本に於て厳格な師範教育を受けたが、其處には服従すべき多くの規則があった。例えば外出の際には外出簿を携帯して、訪問先で時間を記入し、捺印してもらわねばならなかった。生徒時代に於て最も心を用いたことは、帰舎の門限に遅れぬ事であった。それ故私は、此寄宿舎に舎監もなく、校長も、教授も、学生も自由に外出して、何等の問題も起こらぬ事を実に不思議に思ったのである。」このことはC T Cだけのことではないと経験して、「彼等は実に信用を重んずる国民であることを知ったと共に、彼我教育の根本精神に差異あることを認めざるを得ざるに至った」⁽⁶⁾。「伸やかなこころを持ち、しかも傲慢でなく、敬虔の念に満ち、良心に従って行動する学生達」を見て、安井はまさにこれが自分の目指していた理想の生徒であると思い、「其の後教育史を読むにつけ学者の講義をきくにつけ、さすがの基督教嫌いもこの宗教が教育に及ぼした影響の実に大なることを公平に感ぜずにはいられなく」なる⁽⁷⁾。このように安井はC T Cでの教育についての研究から、自国の教育のために「知的教育よりも人格教育に重きを置き、国民の誰もが持ち得る最大資産である品性を陶冶すべきである」と確信し、其の品性を陶冶に英国の国民性の基礎をなしているキリスト教の影響の大きさを認めざるを得なくなるのである⁽⁸⁾。

(2) ミス・ヒューズとの出会い

C T Cでの留学生活もミス・ヒューズの存在がなければ安井のその後生き方や教育観に転換を迫られるほどの影響を受けなかったであろうといわれる。ヒューズの経歴やC T Cでの活動については他に譲り⁽⁹⁾、

安井への直接の薫陶に注目するならば次の点が挙げられよう。第一に教育についての幅広い識見と深い洞察を促したことである。安井はヒューズに留学の目的に適った修学のプログラムを与えられ、学校訪問や識者との会見の機会を用意された。安井は週一回教育と道徳の話を聞く特別の時間のほかにヒューズの案内で英国各地を旅行したり⁽¹⁰⁾、その教育的識見と人格から彼女の後年の教育観の基礎を与えられている。それは品性の陶冶を目的とするリベラル・エジュケーションの理念であり、そしてその基礎にキリスト教が欠かせないとの確信を安井に抱かせたことである。

安井のキリスト教への回心はC T Cでの生活とヒューズとの人格的触れ合いによって導かれたものであるが、直接にはヒューズの兄との出会いがある⁽¹¹⁾。この時安井は受洗を決意するが、注目すべきことは、ヒューズが安井に日本のしかるべき教会を選んで受洗するようにと忠告していることである。ここにヒューズの宗教に対するオープンな態度を看取できるとともに、それ故にこそ宣教師嫌いであった安井にキリスト教を受け入れさせたといえ、さらに後の東京女子大学におけるキリスト教主義教育理念を基礎づけたといえよう⁽¹²⁾。

ヒューズからさらに学んだものに教育における体育の重視がある。「英国では体育すなわち教育なり」というほど品性の陶冶に体育及びを団体スポーツが大きな役割を果していることを、多くの女子教育の現場を見学したり、ヒューズの学生達との登山や戸外の活動に参加することによって確認している⁽¹³⁾。東京女子大学では創設当時から体育を重視し、各科、各学年の共通必修科目として「実践論理」「聖書研究」「英語」「体操」が設けられているが、この「体操」の指導には、英国から帰朝した東京女子高等師範学校教授の二階堂トクヨを迎えている⁽¹⁴⁾。また同学には後に短期大学部に体育専攻科が設置された⁽¹⁵⁾。

安井が英国の教育の特色としてしばしば語っており、これも東京女子大学で実践したことは、心を開き語り合う社交の場としての寄宿舎の重視である。「英国の寄宿舎は別に舎監とてありません。校長が生徒と起臥を共にしているのですから、生徒に与える感化は（日本と）同日に語ること能わぬのみならず、命令的でなく自治的です。生徒が校長を招待したり、あるいは校長が生徒を招待したり……いかにも一家団欒で、人生の良習慣は実にこのうちより得られるのです⁽¹⁶⁾。」というなかに、C T Cにおける学生達の自律的生活を支えるヒューズの日常的教育活動と師弟関係の一端が描かれている。

このようにヒューズの指導のもとに安井が3年間の英国留学で学んだものは年月を経て1923（大正13）年の東京女子大学学長の就任時にのべられた大学における教育の抱負に述べられ、同大学の理念と発展の歴史のなかに結実したといえる。それらは第一に、キリスト教主義に基づいて人格教育に重きをなすこと、第二に、体育に特に重きを置くこと、第三は、リベラル・カレッジの特質を持たせること、第四は、学究生活と社交生活との調和を図ること、であった。

（3）家政学を求めて一大江スミの場合

女子高等師範学校は1897（明治30）年10月、「女子高等師範学校規定」（文部省令第24号）により、本科を文科と理科に分け、翌年4月からこれを実施したが、1899（明治32）年2月（文部省令第6号）さらに技芸科が新設され、理、文、技芸の三分科制となった。技芸科の学科目は、倫理、教育学、国語、外国語、家事、体操の共通科目に習字、図画を加え、音楽を随意科目とした。共通科目中の家事の内容は、文、理科における裁縫・衛生・衣食住・育児・家計簿記・教授法のほか、編み物・刺繡・割烹・看護を加えた。（文科と理科に置かれていた「家事」は1903年廃止される。）これは1889年の高等女学校令にともなう「家事」担当の教員の養成に備えた改革であった。『お茶の水女子大学百年史』は次のように記している。

「わか国の女子教育においては、家事や、裁縫が女子の実生活に役立ちまた就学率を引き上げる科目としてとくに重視されていたが、これまでの女子中等教育におけるこれらの科目の教授には、学力の必ずしも十分ではない教員がこれに当たり、その実績が上がっているとはいえない状態であった。このような時、技芸科が新設され家事専門の教員の養成が行われるようになったことは、注目すべきことだったといわなければならない。しかし、技芸科新設の当初においては、授業上なお遺憾の点が少なくなかった。そこで、当時本校の学科目としての家事を担当していた教諭であった後閑菊野に、東京帝国大学医科大学で看護法を研究させ、また明治三十四年の本校卒業生宮川寿美を文部省留学生に推薦し、三十五年から三年半のあいだイギリスで家政学を研究させた。……宮川寿美は三十九年八月に帰朝し、ただちに家事担当の教授としてその任に当たり、このようにして技芸科における学科目の家事

の授業はしだいに改善された。こうして本校技芸科卒業生が各地に分散して、授業の実際に当たるものが多くなるに及んで、各女学校における家事科の実効がみとめられるようになった⁽¹⁷⁾。」

ロンドンに着いたスミは家政学なるものを何処で研究してよいのか途方にくれ、「わざわざ英国まできて、料理だけを研究してもつまらないではないか。教育学とか、心理学とか、もっと高尚な学問を修め、学校、家庭などを広く視察訪問して教育上の参考にした方がよい」と助言する知り合いの英国人の言葉に迷うが、「しかし、最初の目的が家政学であるから、思いきって、ロンドンのバタシー・ポリテクニクの家政科に入学」した。この英国人とはヒューズであろうと推測される。家政学の研究に見切りをつけた安井と違って、何としても家政学研究の糸口を掴みたいというスミの留学目的への使命感の強さを窺わせる決断である。

彼女の英国での研鑽については、文部大臣宛の「留学始末書」と「申報書」に詳しく書かれている。

「留学始末書」明治39年8月25日 文部大臣牧野伸顯宛 宮川寿美
 「留学申報書」従 36年1月 至 36年10月 36.10.24付 (1)
 従 36年11月 至 37年7月 37.7.31付 (2)
 従 38年1月 至 38年7月 38.7.31付 (3)
 従 39年1月 至 39年7月 39.8.25付 (4)

19世紀後半の英国では、中産階級以上の女性のための中等教育機関及び高等教育機関の発達の流れ—それは先のCTCの設立を要請したものであった—とは別に、労働者階級の女子教育も急速に進展した。これを教育局 (Department of Education) の施策による家政関連の科目の導入に見ることができる。改正法典 (Revised Code) においても、すでに裁縫 (needlework) は女子のための必修科目になっていたが⁽¹⁸⁾、教育局は1878年には家庭経済 (home economy)、1882年に料理、1890年に洗濯を補助金の対象とした。この効果は著しく、これらの科目の履修者は飛躍的に増大した。このような家政関係科目の奨励は、料理や家庭経済に関する無知が貧困を深刻化しているとの教育局の認識から出たもので、教育的意義から導入されたというよりも生徒の家庭の道徳性や健康状態の改善を目指したものであった⁽¹⁹⁾。このような施策に呼応しての家政学校の出現を大江は次のように述べている。

「下等社会ニオイテハ義務教育後スグ女工トナリ、自然家事上ノ知識ガ乏シイノモヤモウエナイ。タトエバ土曜日ニ夫ガ賃金ヲモラッテクルト、高価ナビフテキノヨウナモノヲ食シ、ツギノ木、金曜日ニナルト、財布ガ空ニナッテ水トパンヲ食ストイウ有様デアル。モシ主婦ガ家事経済ノ思想ヲ持ッテイタナラバ、最初カラ固イ安値ナ肉ヲ求メテシチューノヨウナモノヲ作ルデアロウ。コノヨウニ一家ノ経済上イカニ家事科ノ必要カラ悟リ、今カラ20年前有志ノ英国婦人ガ集マリ、中等以下ノ女子ニ家事上ノ知識ヲ与エルタメニ家事教授ヲ研究スルヨウニナッタノガ後ニ段々ト発達シテ今日ニ至ッタノデアル⁽²⁰⁾。」

大江の言うような有志の婦人達の料理センターや家政学校が普及し始めたのは、これらの階級の主婦は、家事を家政婦に任せてより重要な主婦の務めを果たし、妻としての上品さを保つために有能な働き手が必要であったためと⁽²¹⁾、家政を教える教師という新たな職業の開拓のためでもあった。小学校の家政関係の教科が補助金の対象となり急増するにつれて、家事科の教員の養成が急務となっていた。大江が述べているように、有志立の家政学校は急増しているが⁽²²⁾、1889年の技術教育法以後、ロンドン技術教育委員会はチャリティー委員会の支援を得て、労働者階級のためのポリテクニク（工芸学校）の設立に力を注ぐ。バタシー・ポリテクニクはその動きの中で設立されたものであった⁽²³⁾。そこには女子に家事を教える家政学部と女子のための中等学校が設立されていた。

大江の入学したのは同校に併設された家事を教える教員を養成する師範学校であった。家政師範学校は1894年の開校であるから、すでに開設後10年を経ており、卒業生が322人に達していた。生徒が英国全土はもとより、オランダや日本からも来ていることが記されている⁽²⁴⁾。大江は「英国では財政が豊かでありますから、万事設備がよく整っており、日本から参りましても余程参考になります⁽²⁵⁾。」と言っている。ここで彼女は教育理論および洗濯法、調理法、裁縫、家事、化学、衛生学、救急法を実習により学ぶ。

「諸処ノ学校ニツキ感ゼシハ、学校ノ組織及科目等ハ我国ト大差ナシト雖モ、当地学校教育ハ、タダニ理論ヲ教スルノミナラズ、実習ヲ主トシ、生徒ヲシテ自カラ其事ニ当タラシメ、他日学校ヲ

出デシ後、実施シヤスカラシムルコト、及諸学科ノ関連セルコトナリ。……コノ他理化学上ノ知識ノヨク日常ノ事項ニ応用セシムル如キ、是等ハ些少ノ如クナレドモ、我学校教育上考エルベキコトト思ヘリ⁽²⁶⁾。」

という実地教育の重視は、英国内やヨーロッパの学校視察でも度々確認した事であり、大江は日本の家事教育の緊急の課題と受け止めていった。『申報書』や『三ぼう主義』に繰り返される「家事における実習の必要」の訴えは、女高師教授時代、教授会で「もっともっと予算を増して欲しいと卓を叩いて、涙を流して⁽²⁷⁾」設備の充実を主張させることになる。

(4) ベッドフォード・カレッジへの入学と視察旅行

日露戦争によって帰国が困難になったため、スミは留学の延期を願い出てベッドフォードカレッジへ入学する。彼女の学んだ衛生科は、1895年に、当時開かれた公衆保健局のポストを得るために組織的な準備が必要である、との衛生学の講師の提言で開設されたもので、衛生学と諸科学と保健視学官の技術的要求にも応じうる科目を揃えた2年の課程であった。人数はそれほど多くなかったが、一般の学生よりやや年長の、高い教育を受けた学生達が入学し、若い学部学生に知的な刺激を与えたといわれる。その課程に付された資格は後に各種公共団体に認められるディプロマとなった。この課程は早期に専門職の資格を持つ女性を送り出すという画期的な制度であったために、カレッジの評価を高めた。テュークはこれらの公職についてパイオニアたちの名を挙げているが、そこに東京家政学院校長の宮川スミの名も見える⁽²⁸⁾。大江はここで「衛生及び衛生法」、「化学」、「生理学」、「物理学」を学び、修了後に公衆衛生検査員の試験に合格し、ロンドン市衛生士の資格を得る。ここでの研鑽によってスミはポリテクニクの実習によって学んだ家政関連科目を科学的に基礎付けることができたと思われる。後年彼女が著わした『応用家事精義』第一巻緒論住居之部は、「家事の教科書は多くあるが、教授者の好伴侶となるべき詳細、確実な科学的知識に基づいた参考書はない」ので、家事科担当者の参考書として自信をもって世に問うた922頁の大著である。本論は住居に関する事項についての詳細な内容であるが、その参考文献として挙げられている著書を見ると、衛生学、公衆衛生、家庭経営、家政学、家庭科学教授のための設備といった英書が主であり、ベッドフォード・カレッジにおける学習の成果を遺憾なく発揮したものといえよう。

ベッドフォードでの完備した施設設備や自由な知的雰囲気への感動は、ポリテクニクでは得られなかったもので、「申報書」には次のような記述が見られる。

「当女子大学ニ於テ、ソノ寄宿料及学資等高価ナルコト我国ノ非ニアラズ。サレバ寄宿舎ニ設備モ滋養アリ。講義外ニハ学生ノ意志ニマカセ、知識ノ発達・精神ノ修養ニ必要ナル集会ニハ自由ニ出席セシメ、ソノ方針タルタダ校内ノ空气中ニテノミナラズ、世ト共ニ進ムマシムルニアリ。……⁽²⁹⁾」

すでにポリテクニクでの学習に慣れる頃からスミは種々の会合に出席して、英国の社会状況を見聞したり、各種の学校の見学や家庭訪問の機会を得、広く人々と意見を交わす機会を持っていた。明治38年の申報書には教育学、家政学あるいは宗教関係の大会に出席したことが報告されている。ヒューズが望んだ「英国の教育を広く見聞し視野を広げる」ことになったのである。シャム時代の安井の手紙⁽³⁰⁾にもそのことを窺わせる箇所がある。『三ぼう主義』には英国の家庭を訪れたり、会合で日本の家庭や女子教育について紹介し、その後活発な応答が繰り返される様子が生き生きと描かれている。そのような体験からスミは今見る英国の学校教育や家庭、女性のあり方などを日本のそれらと対比し、各々の長短について比較吟味する。それらは日英の比較文化論とも言える『三ぼう主義』に総括されたのであった。

さらに大江が大きな感銘を受け、家庭や学校教育の根底に欠くことができないものと確信したのは宗教に基づく精神教育あるいは道徳性の涵養であった。招待された家庭の中での礼拝に参加して、宗教によって清められた家庭で育てられた英国紳士が世界に飛躍する英国をつくるとの感慨や、オックスフォードやケンブリッジを訪問して、宗教教育が英国紳士の養成に大きな役割を果たしていることを知る。従来の個人的信仰が、国家の発展に必要な精神的支柱へと拡大して、『三ぼう主義』の思想となり、彼女の良妻賢母思想の基盤となるのである。

3. 女子教育思想をめぐって

(1) 教養主義と実学主義

安井でつも大江スミも共に英国留学での研鑽によって自己の女子教育の理念を形成し、帰国後それぞれの場においてその実現に尽力すること

になる。ここではその活動の実際の姿は伝記に任せ、英国留学から得た両者の女子教育の理念の根本的違いに注目し、その差をもたらした要因を考察しておきたい。

安井はこれまで見てきたように、とくにミス・ヒューズの指導を中心とするCTCにおける体験から、日本の女子教育にとって根本的に必要なことは、性差を越えた人格的、教養主義的教育によって自由な自律的な教養ある婦人を育成することであると、そのためにキリスト教による基礎づけが欠かせないことを確信した。次の『新女界』の論説「真に教養ある婦人」は安井の女子教育観を端的に言い表している。

「私は能く心の訓練された婦人が、家事を整理する事の巧であるのを実地体験致しました。例へば数学や理科に長じた女性は、裁縫や習字のみを能くする生徒よりも、一見妻としては不適当のように思はれますが、実は正反対で、頭脳の明瞭な女子程種々工夫をして、複雑な家事を整え、経済にも亦巧であります。又機械的な事のみ練習を積んだ婦人は、往々複雑な人事を判断し、敏捷に之れを処置する事の出来ぬのも、屢々実験するところであります。殊に子供の教育に対しては、どうしても、十分に教育ある婦人を必要と致しますので、未来多き可愛い子供の運命が、母親の力に依って、其の大部分を定められる事を考えますと、女子には裁縫料理の外に必ず何等かの要素がなければなりません。妻のみの時代は短く、母としての時代は非常に長くあります⁽¹⁾。」

このような家事教育無用論ともいべき女子教育論を、さらに英国と日本の女子教育の目的を比較して次のように述べる。

「日本の各女学校を通覧するに、たいてい、良妻賢母を作るといふにあらざれば、実用的の主婦を養成すといふが如き、同一意味の語句を見ざるなしといへども、英国の女学校規則にはかかる良妻賢母、主婦などの文字を見ることなし。……特別に『女の学校なれば』という意味を規則の上に現わさず、教授の上にもさる考えを持たざるが如し。日本の女学校にては、修身の教授に『汝等は女なるが故に』という語が屢々用いらるれども、英国にかかると語を発したる教師は余の未だ聞かざる所なり。常に男子に向かつて説くと同じ『汝等は人間なるが故に』或は『クリスチャンなる

が故』斯くせざるべからずというなり。即ち、単に知識を注入するのみを目的とせず、また実用に適せしむるのみを主眼とせず、人としての品性を陶冶することにもっとも力を用うるなり。彼の女学校にて『女なるが故に』の語を聞かざるは……即ち教育の目的は人を作るにあり、而して人たる品性には、男子と女子とに等差を設くべき理由あらざればなり⁽²⁾。」

安井が英国留学中に培ったキリスト教に基づく人格主義、自由主義、個性尊重の教育理念は生涯変わることがなかったと言われる。その教育理念は東京女子大学において具体化された。エディンバラ世界宣教会議の決定を受けて、エキュメニカルなキリスト教主義に基づいて真理を追求する、男子の大学に匹敵する本格的な高度の女子大学を目指したことは、一時理事会で経営上家政科を設置しようとした案の出た時も、安井はその理事会案に非常に不満であり、その案が不発になった時喜んだというエピソード⁽³⁾からも窺えるのである。中等教員資格無試験検定の認可をめぐる職業教育に対する警戒も⁽⁴⁾、安井のリベラル・カレッジの志向の強さを示している。

一方大江スミはこのような安井の女子教育観に真っ向から対立する⁽⁵⁾。即ち、女子にとって中等教育の年代においては男子と対等の学力を養うことが必要であり、其の意味では高等女学校の内容を男子の中学校のそれと対等にすべきであるが⁽⁶⁾、その後は良妻賢母として必要な資質を身につけるために、家事に必要な実地訓練を含む家政学を修めさせるべきである、という。家事教育における実地教育の重視について「理論のみ教えることによって生徒は物知りの積もりになり、自然傲慢な品性となり、不真面目な活用しがたい人となる。実験・実習によって実地に教えこむならば、謙虚で真面目な人をつくることができる⁽⁷⁾」という大江にとって、家政学は家事という教科を超えた、普通教育を統合する一般教育科目であったといえる⁽⁸⁾。

彼女は英国の女子と比較して今後の日本の女子教育方針を『三ぼう主義』において次のように総括する。1. 十分学問をさせ知識を広め、頭脳を発達させ、整頓した思想を持たせ、2. 従来の日本の女子の犠牲克己の精神に富み、いかなる困難をも耐え忍び、従順で謙遜な婦徳を備えさせ、3. 家事経営上必要な、裁縫、料理、清掃、応対などにつき十分実地練習させ、衣食住、養老、育児、看護、経済に至るまで、よく取り廻しのできる女子をつくらねばならぬ、と⁽⁹⁾。大江は「家政学は理論と

実地が必ず相伴しなければならぬ最も実際のなもの。理科の一部ではなく、独立した学問」であり、「家を齋えることを研究する学問」であると定義する。したがって家政学の使命は「諸科学において得た科学的、道徳的、芸術的知識をいかに齋家に応用すべきかにある」とし、さらに「家政の良否が国家の盛衰興亡にかかわると位置づけ、家政学を『治国の学』と意味づけた⁽¹⁰⁾。

(2) 女子教育思想の差をもたらしたもの

対照的な両者の女子教育理念と実践の背景になっているものとして、まず第一に、それぞれの生来の資質の差とそれをさらに助長した生い立ちが考えられる。

安井は武士の家に生まれ、武士道的精神を幼少より祖父母の養育によって培われた。その生涯における決断や伝記のなかに見られる数々のエピソードは、彼女のそのような生い立ちからくる清廉さ、潔さ、理想主義、学問志向などを示しているが、英国において家政学の研究という課題を心理や教育学あるいは文学の研究に振り向けて、自己の納得するものにだけ関心を集中させるという信念の固さを持っていた。

CTCは本来中等教育の教員養成を目的としており、ヒューズもこの面でのパイオニアとしての知見と情熱を持っていた⁽¹¹⁾。しかし安井は留学前後に女子高等師範に席を置きながら、先に見たように、後年にいたっても、教師としての専門教育に関心を示さない。ヒューズの助言に従って、授業や試験への出席よりも女子教育についての見聞を広めることに努めたためであろうか。CTCが従来の「教員養成機関の伝統を捨てて、科学的哲学的な教育理論を重視していた⁽¹²⁾」ことによるものであろうか。いずれにせよ「教養ある婦人」という女性の理想像のなかに、彼女の教養主義的理想主義が貫かれている。

安井が家政関係の科目は中等以下の生徒のための小学校 (elementary school) で教えられており、衛生観念の乏しい貧民の家庭改良の一助とする程度の低いもので、自分とは関係のないものであると断じているのに対して、大江はそのような事情を承知しながら「思いきって」労働者階級のために創設されたバタシー・ポリテクニクに入学する。ここに安井とは異なる平民としての大江の庶民性と自立のために女子高等師範を選んだ自己の運命を切り開いていこうとする積極性が見られる。また大江はすでに東洋英和でキリスト教に入信しており、宗教的基盤が教育に不可欠であることを体験的に認識していた。人格教育の基盤としてキ

リスト教を受け入れざるを得なかった、即ち教育理念をキリスト教信仰と一体のものとして受け入れるために苦悩した安井と違って、家政学そのものを独自に求めていくことが可能な立場にあったといえよう。

両者の家政学に対する取り組みの違いは、第二に、僅か数年ではあるが、時代的背景が大きく影響しているといえる。安井は文部省の命じた留学目的を「より広く一般的な女子教育の研究」と解している。これは当時の高峯校長の助言でもあった。この点で安井の時代は家政学研究のための留学は「高度に細分化された領域の、かなり精密な研究」という段階よりも、まだ「包括的な西洋文化の導入と受容⁽¹³⁾」という性格をもっていたといえる。また安井の時代の高等師範の特殊性もあった。男子と同じ学力、教養を身につけることが女子の高等教育に課せられた使命であるとは安井にあっては当然の事であった。

1901（明治34）年に改正された「文部省外国留学生規定」は、より詳細に留学中の修学に関する規定を定め、毎年1月と7月に申報書の提出を求めている⁽¹⁴⁾。このため大江の留学中の動静を知ることができるが、大江が実習に重きを置くB. ポリテクニクでの学習を基礎にして、それをより科学的、また社会的に理論づけるためにベッドフォード・カレッジでの研鑽へと発展させたことは、「細分化された領域のかなり精密な研究」を遂行する使命感を抱いていたためと言える。何よりも高等女学校令に伴う女子高等師範の技芸科の発足により、家事教育の内実を整えねばならないという焦眉の課題を背負っていたからである。

大江の時代はまた日露戦争直後の日本の高揚期でもあった。「有難くも戦勝の結果、至る所で日本教育法如何を尋ねられ……」と英国の家庭や会合で日本の教育について語る中で、日英の家庭や女性の在り方について比較吟味することによって「治国の学」へと展開していった大江の家政学が構想されていった。『三ぼう主義』において「鉄砲」と「説法」とともに国運を担うと位置づけられた「女房」は、日本の伝統的な婦徳と、家事を主体的にこなす主婦としての技量を備え、英国婦人のように夫と同等の識見をもち、公務に対する理解をもち客の応対等をこなす夫の良き伴侶であり、家を齎ることによって対等に国家に対して役割を果たすという良妻賢母である。

以上明治期に家政学の研究のために相前後して英国に留学を命ぜられた安井とつと大江スミの留学の成果をその後の活動とその基盤となった女子教育観の形成過程を比較しながら見てきた。英国の女子教育史との関わりからとらえ直すと新たな局面が浮かび上がってくるのではないか

と考えた。本稿はその作業の序説として二人の経歴と接点、英国での修学と女子教育思想の形成を対比したものである。

註

1

- (1) 青山なを『安井てつ伝』岩波書店、昭和24年
- (2) 大浜徹也『大江スミ先生』東京家政学院光塩会、昭和53年
- (3) 両者を比較した研究としては、家政学の立場から常見育男の「明治期三名の家政研究の留学者に関連して—日本の家政教育の家政学発達歴史の側面—」『家庭科学』1982-1（第89集）がある。また、『大江スミ先生』はしばしば安井との関連や比較で記述されている。CTCについては註2-3参照のこと。バタシー・ポリテクニクについては同校の昇格したサリー大学の Arthur Chandler (University Archivist) 氏より “The Battersea Polytechnic—A Record of Ten Years 1894-1904” 及び “Pioneering in Education for the Technologies—The Story of Battersea College of Technology” を恵与され、ご教示を得た。
- (4) 『安井てつ伝』p.19
- (5) 内海乙女「安井先生を偲びて」青山なを編『安井てつ先生追想録』昭和41年
- (6) 『安井てつ伝』pp.22-24
- (7) 『安井てつ伝』pp.33-34
- (8) 『大江スミ先生』pp.4-6
- (9) 大穴主義とは払う見込みをつけて借金の穴を作り、無駄を省いて借金の穴を埋めていく方法。若いうちに夫婦が家を持ち、経済的基盤を作ることを奨励した。
- (10) 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、昭和40年
- (11) 大江スミ子『三ぼう主義』宝文館、1917（初版1910年）
- (12) 東洋英和五十年史
- (13) 『大江スミ先生』p.50

2

- (1) 『安井てつ伝』p.49には「そのころは広い意味での研究が必要なので二科を選ばれたのだと思います。校長は……唯学問を勉強してくるのみでなく、英国に於ける女子教育について広く視察してくるようにとのことでした。」とある。
- (2) 『東京茗溪会雑誌』第百八十五号 p.6
- (3) CTCの設立などについては Bottrall, M. “Hughes Hall 1885-1985”, Rutherford, 1885, pp.3-28. 中嶋みどり「19世紀イングランドにおける女子中等教員養成—ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ創設の背景と経緯」『日本の教育史学』第40集、日本教育史学会、1997
- (4) 『安井てつ伝』p.50
- (5) 『安井てつ伝』「中等教員検定」pp.179-19
- (6) 安井てつ「私の今日に至るまで」、『安井てつ伝』p.71
- (7) 安井てつ「青春時代の追憶」、『新世界』4-10、大正元年

- (8) 安井てつ「私がキリスト教を信ずるに至りし経路と体験」
- (9) ヒューズについては Bottrall, "Hughes Hall 1885-1985" および Hughes, M. V., "A London Girl of the 1880s", O. U. P., 1943, rep. 1977. 前掲『東京茗溪会雑誌』、また日本滞在については、大野延胤 "E. P. Hughes in Japan(1901-1902)" 学習院大学文学部研究年報、第36(1989)に詳しい。
- (10) スイス旅行にも随伴する。
- (11) 兄 Hugh Price Hughes はメソヂストの牧師で国会議員。受洗を決意するが、ヒューズに帰国後宗派を決めるよう助言される。帰国後弓町本郷教会の海老名弾生より洗礼を受ける。生涯同教会員として奉仕。「新女界」主筆となる。『弓町本郷教会百年史』1986、参照
- (12) 安井はしばしばキリスト教から 'something' を得るように学生に講話している。宣教的な言辞を嫌った。『東京女子大学五十年史』昭和43年p.39。
『安井てつ伝』pp.364-372
- (13) 前掲『東京茗溪会雑誌』にヒューズがスウェーデン体操を推奨していることを紹介
- (14) 西村綾子『体育に生涯をかけた女性—二階堂トクヨ—』杏林書院、1983、pp.186-188。安井と二階堂トクヨとの関係およびヒューズの日本の体育界への影響について言及されている。二階堂トクヨは寄宿舎舎監としても安井に依頼され奉職。
- (15) 名倉英三郎元東京女子大学教授のご教示による。
- (16) 『万朝報』の記事など、『安井てつ伝』p.110
- (17) 『お茶の水女子大学百年史』1984、p.82-83
- (18) Curtis, M. A., "History of Education in Great Britain", Univ. Tutorial P. 1953, p.258.
- (19) Cooper, A. J. "Domestic Economy Teaching in England", Education Dep. "Special Reports on Educational Subjects", Vol. 1, 1897.
- (20) 『三ぼう主義』p.97
- (21) 「繊維工業の発達にもかかわらず、若年、老年を問わず、労働者階級の女性にとって、もっとも一般的な職業は家事奉公だった。」ロバーツ、E. 『女は「何処で」働いてきたか』法律文化社p.29、バンクス夫妻『ヴィクトリア時代の女性たち』第5章「完全なる妻」第6章「ジェンティリティーの流行」など。ヴィクトリア時代の女性像の階級差について今日では常識化しているが、安井もこの点を指摘しながら(婦女新聞明治34年4月22日、「英国の女学校」)、家政関係の科目を女子教育に必要なものとする論拠としている。
- (22) 田中久子『欧米における家政学』宝文社、1965、pp.94-96
- (23) Archer, R. L., "Secondary Education in the Nineteenth Century", Frank Cross, 1966, p.281. Argles, M. "South Kensington to Robbins, An Account of English Technical and Scientific Education since 1851", Longmans, 1964, pp.36-39

- (24) University of Surrey, "The Battersea Polytechnic-A Record of Ten Years 1894-1904", pp.62-66. 卒業生322人中教職に就いている者が179人とある。
- (25) 『三ぼう主義』p.96
- (26) 申報書(1)
- (27) 『大江スミ先生』p.205
- (28) Tuke, M. J., "A History of Bedford College for Women 1849-1937", O. U. P., 1937 pp.158-160. また Purvis "A History of Women's Education in England' Open Univ. P. 1991, p.119 もこれを引用している。
- なお、ロンドンの公衆衛生検査員 (Sanitary Inspector) の任命は1893年からで、資格試験は年2回、科目には衛生法規、建築、配水、廃水法、配管、暖房、換気、伝染病などがあつた。The Countess Warwick, ed., "Progress in Women's Education In Great Empire", Longmans, 1898, p.231
- (29) 申報書(4)
- (30) 「ヒューズさんから此間手紙が来て……宮川スミが非常に変わったとかいてありました。」明治37年5月8日付け野口ゆか宛手紙、青山なを編『若き日のあと』p.155.

3

- (1) 安井てつ「真に教育のある婦人」『新女界』1-9、明治42年11月
- (2) 前掲 婦女新聞「英国の女学校」
- (3) 安達文子「栄養科主任事件」『安井てつ先生追想録』、この件については福岡女子大学秋枝蘭子名誉教授(東京女子大学卒)のご教示による。
- (4) 『安井てつ伝』pp.236-238
- (5) 『応用家事精義』p.12、この点については『大江スミ先生』pp.149-151
- (6) 大江は女子の中等教育の程度が男子より低いのは不十分である。男子が10とすれば女子は4である、という。
- (7) 『三ぼう主義』pp.105-106
- (8) 吉永フミ『大江家政学の展望』(大江スミ先生を語り継ぐ会・平成七年度KVA祭展示資料解説)には、「日本の台所だけの狭い家事科をもっと広い社会的な立場から見直す必要あり」として新しい家政学の樹立に意気込み、安井の「女子の家事教育は不要」の意見に反論したことが述べられている。
- (9) 女子高等師範を辞職してその理想とする東京家政学院を創設した際、モットーはK (Knowledge) V (Virtue) A (Art) であった。このVにはキリスト教を含んでいる。
- (10) 『大江スミ先生』p.189
- (11) 来日中のヒューズは日本の教育について「知識偏重」「学校中心主義」に警告を発するとともに、「教育方法の画一性」を批判している。婦女新聞明治34年2月23日「ヒューズ女史演説大意」また、CTCでの教授

法の革新性も紹介されている。前掲“Hughes Hall 1885-1985”。

- (12) Rich, W. R., “The Training of Teachers in England and Wales during the Nineteenth Century”, C. U. P. 1933, p.263. “Hughes Hall 1885-1985” pp.7-8
- (13) 石付実『近代日本の海外留学史』中公文庫、p.313
- (14) 明治34年4月8日文部省令第9号文部省留学生規定細則第十一条。三十一条。留学始末書、旅行日記の提出も規定されている。なお36年4月細則改正。文部省内教育史編纂会 『明治以降教育制度発達史』第四巻昭和13年、pp.462-464

本稿の執筆にあたってはとくに次の方々にご教示とご配慮をいただいたことを感謝をもって付記します。

Dr. Basil Herbertson, former President, Hughes Hall, Cambridge.

Dr. Perter Brook, former Archivist, Hughes Hall, Cambridge.

Mr. Arthur R.Chandler, University Archivist, University of Surrey.

吉永フミ 元東京家政学院大学教授

秋枝繭子 福岡女子大学名誉教授

西村綾子 日本女子体育大学教授

東京女子大学比較文化研究所、お茶の水女子大学女性文化研究所、筑波大学図書館、東京家政学院大学図書館、フェリス女学院資料室、神奈川女性センター。

**The formation of Educational Thought for Women
by Study Abroad in England
—A Comparative Study of
the Cases of Tets Yasui and Sumi Ōe—**

Akiko Shibamura

In the process of the modernization of the Japanese educational system, the secondary school system for girls had or been lagging behind until the issue of high school for girls was settled in the public school system in 1899.

Tets Yasui and Sumi Ōe were sent to England at the beginning of this century in order to make an investigation of domestic science to England as a model for the domestic economy, which was the most important subject in high school for girls at that time.

Both Yasui and Ōe, after having graduated from Advanced Teacher Training College, and having gained teaching experience for a while, were nominated as students abroad by the Ministry of Education.

In spite of the similarity of their careers, they developed very different ideas of women's education.

Yasui chose Cambridge Training College for her study. This college had been newly founded and was the most prestigious institution of post-graduate college for training teachers of secondary schools. She experienced a conversion by education and student's attitudes of the Training College. Specifically, Miss Hughes, the first principal of that College, gave her the most profound influence with her character and teaching. Yasui's educational idea for women is that women should be educated as human beings not as women, as conventionally thought in those days. Her educational thought for women was that of liberal education which was influenced by the educational ideal of Cambridge.

Ōe, on the other hand, advocated that girls should be

educated to be “a good wife and a wise mother”. Her idea of women’s education —education of “a good wife and a wise mother”— was composed of the traditional ideal of Japanese women as an active worker for household, the ideal of “a better half” as seen in the English home, and the ideology of imperialism. For her, a good wife sustains the State as well as armaments and religion.

Ōe studied at the Training School of Domestic Science in Battersea Polytechnic and later she went to Bedford College to study in the hygiene course.

The institutions they studied at influenced the formation of their contrastive educational ideas. It is interesting to notice the backgrounds of their own decisions as students abroad, sponsored by the government.